

講 評

早稲田大學政治經濟學會 総務委員長
縣 公一郎

2020 年度本學會論文コンクールには、単著論文 35 作品、そして共著論文 12 作品、計 47 作品の応募がございました。全て、学部学生の方々の作品でした。その学年構成は、齋藤会長仰せの通りです。多数ご応募下さり、有難う存じました。厳正なる審査を実施した結果、本年度から、数理・統計計量部門、及び歴史・思想・その他部門の両部門を設定することとし、次の 4 作品を顕彰致します。以下の通り紹介し、それぞれの業績を讃えます。洵におめでとうございます。心よりお慶び申し上げます。

数理・統計計量部門

優秀賞

Nakamura, Kentaro, “Telling China’s Stories Well? How the Story-Telling in China has Changed under the Pandemic”

This paper discusses how the Chinese government’s public diplomacy has changed under the COVID-19 pandemic. A good deal of articles from the English editions of the two Chinese newspapers have been retrieved and analysed using sentiment analysis to consider the statements made by the Chinese government to its own country and the United States. The empirical analysis was proficient and properly conducted in a timely manner, which deserved the award.

佳 作

有川正伸「第 24 回・第 25 回参議院議員通常選挙における有権者の影響力評価」

本論文は、日本における選挙での一票の格差という問題を探り上げ、その分析に携わった特定の先行研究における問題点を指摘した上で、その改善策を提示し、実際に分析を展開した作品である。具体的には、平成 28 年及び令和元年における 2 回の参議院通常選挙結果を対象として、当該先行研究を踏まえたモデルによる分析に加え、独自に設計した指数を用いた分析をも展開し、それぞれ、一票の格差に関して一定の結論を得ている。その結果、新たに提示された指数は、更なる改善の余地はあるものの、先行研究に対して一定の貢献を為したと評価される。

佳 作

高橋優介「ふるさと納税において善意はどれほどの影響を持つのか ―災害復旧支援を題材とした納税者の心理的インセンティブに関する実証分析―」

本論文は、ふるさと納税制度において機能する経済的インセンティブと心理的インセンティブに着目し、特に被災した自治体に対する寄付に際してこれらが如何に作用するのか、この観点に関して2つの仮説を設定した上で計量分析を施した作品である。全国の自治体を対象としてデータ収集・分析した第一段階の結果を踏まえ、2018年に発災した事例に絞って更なる分析を加えている。一般的には、インセンティブとして前者が後者よりも強い影響を及ぼし得ることが示された一方で、被災前から各自治体自身が広報を展開している場合には、僅かながらも有効に作用し得ることが示されている。ふるさと納税への影響要因に関する分析として、重要な業績であると評価される。

なお、両佳作の掲載順位は、審査結果順位を示すものではありません。

歴史・思想・その他部門

優秀賞

滋野峻也「明治―大正期台湾公学校における教育勅語の実践 ―音声・文字プロパガンダとしての勅語に関する一考察―」

本論文は、戦前の台湾における教育勅語の実践を、プロパガンダにおける音声と文字という両側面から分析して居り、当時現地での資料を丹念に渉猟し、具体的な実践過程を分析し、新しい知見をも紹介している。この過程においては、上記両側面のうちどちらによる実践がより優先されていたと考えられるのか、という点に結論付けている。問題設定に独創性が認められ、方法論的にも明解であり、学部学生による論文として高く評価される。

上記4作品に加えて、学部学生の論文として優れた作品が多数提出されていたことを付言致します。来年度も、両部門設定を行って審査する予定です。大学院生の方々を含め、奮ってご応募下さるよう、お願い致します。